アダム・スミスの蔵書をめぐって

名城大学商学部教授
水田　洋

1

今日は，アダム・スミスの蔵書をめぐってというテーマでお話をするのですが，その前にもう少し一般的なブックハンティングということについて，序論的にお話します。

古い本を探して歩くのが，ぼくの趣味であり仕事でもあるわけです。それで，長く勤めた名古屋大学には時々とんでもないものを持ちこみました。世界で一番たくさんアダム・スミスの署名の入っている本が名古屋大学の経済学部にあります。どういうことかといいますと，ある時ぼくがエディンバラの古本屋を歩いていましたら，そこの親父が出てきて「イクサイティングなものがある」というんですね。「それは何だ」と聞くと，こういうことなんです。アダム・スミスは，晩年にスコットランドの税関の関税委員をしていて，ずいぶん暇だったんですね。暇だからその職についたのだと思います。毎朝籐（ケイン）のステッキを持ち，絹のネクタイ，ネクタイといってもその頃はひじょうに幅の広いものですが，そのネクタイをし，そして銀のバックルをつけて登庁して来て時々なにか呟いている。それで魚売りのおばさん達が「かわいそうにね，あの気違い」といっていたそうです。スミスがはいって行くと衛兵が，儀仗兵ですから銃ではなく，杖をあげて敬礼した。そうしたらスミスが自分のステッキを同じようにあげてなかなか降ろさないのです。衛兵はスミスが降ろさないうちは降ろせないものですから困ってしまったらしい。結果はどうなったか知りませんが，そういうふうにしてスミスがかよっていた時に，税関の書類にたくさん署名をしました。その署名をした書類を綴じたものが，ダンバーというスコットランドの南東部にある町の税関の倉庫から出て来たのが古本屋に流れまして，それを買わないかっていうんですね。後でちょっと触れますように，アダム・スミスの蔵書は世界中に散らばっていますけれども，一番たくさん持っているのがスミスが最後にいたエディンバラの大学図書館，その次がベルファストと東京大学です。そういうことがあるものですから，その由来は後でお話ししますけれど，あのエディンバラの古本屋は日本に売り込もうとしたんだと思います。で，ぼくも東京大学にいれるのが一番いいと思ったのですが，東大では，この書類が一体スミス研究にどういう意味があるのか，それを説明してくれというのです。しかし，それは全部読まなければ説明できないし，また，図書館のいいところは，役に立つかどうかわからないようなものを集めるということなのです。始めから価値がわかっているものは少しもおもしろくない。だいたい学問というのは，わからない領域へ行くから冒険的でおもしろいのであって，何の役にも立たない研究をしろと賞金を出した人さえいるくらいなんですね。ですからそんなこと説明できないといったら，それじゃ買わないっていうんで，とうとう名古屋大学で買うことになったのです。この書類のことは今バンクーヴァーでアダム・スミスの伝記を書いているイアン・ロスという男も知らないわけです。そのうちこっそり教えてやろうかと思っているんですけれどもね。

というようなことがありまして，いろんなものを見つけるというのか，あるいはこちらが見つけられるというのか，そういうことはいろいろある。なぜそういう古いものを集めるのかということは，なぜ歴史を研究するかということとほとんど同じことになるわけです。皆さんの中には，歴史が趣味だとお考えの方もあるかもしれませんが，そもそも趣味という言葉にあたるtasteというのは，アダム・スミスの頃は manner，つまり風俗習慣と同じですね。その mannerから moral すなわち道徳という言葉がでてきているわけです。日本では道徳というとみんな「べからず」あるいは「べし」で，とにかく上から押しつける。とくに文部省の道徳はそうですね。ここには文部官僚の方もいらっしゃいますけれど，文部官僚と文部省は別ですから構わないと思うんです。道徳とは本来，人間が社会の中で暮らして行くために作るルール，自分達が作るルールであって，その中に taste という言葉も含まれているわけです。したがって趣味とは，どうでもいいことではなく，むしろ人間の生活の中で必要な態度なのですね。

それではなぜ歴史が必要なのかということですが，その話に深入りしたらきりがないので適当なところで切りあげます。普通，大学で研究をするということは，現状あるいは現在の問題を解明する理論の構築，それが中心になるということだと思います。ところが，その理論がときどき壁にぶつかることがあります。ひじょうに最先端のところであればあるほど，いろんな壁にぶつかるわけです。その壁にぶつかった時にどうするかというと，いろんな方法がありますが，その壁を打ち破るためにその理論の発生のもとへ帰ることがしばしばあります。というのは，その最先端の理論がひじょうに精密化され，そこではひじょうに正確にはなっているかもしれないけれど，実は発展の途中で何か忘れものをしているのではないか，つまり始めにあった前提を忘れたのではないかとか，あるいは，始めには他の理論と一緒になってまとまっていたものが，ひとつ抜け落ちてしまっているのではないかとか，いろんなことが出てきます。ですから，理論の最先端でさえ，いつかその発生元へ戻らなければならなくなるかもしれないという問題を常に孕んでいます。そうなった時に，そこまで考える理論家はあまりたくさんいないのです。ですからやはり専門馬鹿と言われるわけです。しかし，発生のもとに戻る時に図書館がものをいう。図書館の歴史的な蓄積がものをいう，ということになるのです。

その時にもうひとつ大事なことは，そういうふうに歴史を振り返って理論の発生を辿る，発生史を辿って行く時に，例えばアダム・スミスの例でいいますと，スミスの『国富論』というのは新しい版がたくさんあります。ですから，何も古い版を探さなくてもいいと一般的にはいえます。しかし，そこに二つの問題がある。

まず第一は，スミスの『国富論』というのはマルクスの『資本論』とならぶ経済学の歴史における第一級の古典ですが，その『国富論』が形成される過程で何が使われたかという問題がある。スミスほど一流の人間ではないかもしれないけれども，多くの二流，三流，四流，五流の人たちが何となく貢献しているということがある。あるいは，その当時の新聞記事でさえ貢献しているのかもしれない。そういう二流，三流の著作というのはなかなか残らないし，リプリントも出ない。したがって，図書館は，あるいは個人蔵書でもそうですが，蔵書について誇るなら二流品，三流品を持っていることを誇るのが本物なのです。一流品を誇ることは何でもないのです。誰でもわかっているのですから。それが，ひとつ。

第二の問題は，『国富論』の例でいいますと，『国富論』はスミスが生きている間に5回増補改訂されています。現在手に入る『国富論』は最後の5版をリプリントしたもので

す。しかし，5版と初版の間には23年の差があります。その間にアメリカの革命がおこる。つまり，『国富論』が出たのは1776年，アメリカ革命の年です。それから最後は1789年，フランス革命の年です。フランス革命は，『国富論』の限りでは直接スミスの視野にはいってきませんが，その間に産業革命も進行します。『国富論』は五つの版を重ねるうちにそういうものを吸収しているわけです。ところがその各版の違いとなると，これはそれぞれの版を読むより仕方がない。たしかに今出ているグラースゴウ大学版『アダム・スミス著作集』には，何版でどうなっているという注がついています。ところが，その注を頼りにさかのぼっていくのと，それぞれの版を直接読むのとでは，どうしても印象が違います。これは何回やってみてもそうです。というのは僕は自分でスミスの二つの著作を翻訳しましたが，その時どちらも初版を翻訳して，訳注であとの版の変化を書いたわけです。しかし，それで後の版の全貌がわかるかというと，どうもよくわからない。つまり印象として薄いのです。そこで，どうしてもいくつかの版を揃えなければならないということになります。しかしこれは個人ではとてもできない。やはり図書館でそれを蓄積するしかない。あまり勉強しない人は，リプリントがあるからいいじゃないかというわけですが，本当に歴史的な研究をしようとすれば，一つの著作についていくつもの版を集めることばかりでなく，その一流品が形成されるのに貢献した二流品，三流品，四流品を集めることが必要になるわけです。日本では二流品，三流品ばかりを集めるなどというと軽蔑されそうですが，決してそうではないのです。そういうものを集めている図書館にはどこがあるかというと，例えば一橋大学にフランクリン文庫というのがあります。これはフランクリンという古本屋が集めたものです。フランクリンの場合は特に二流品，三流品ばかりを狙ったわけではなく，安い本ばかりを買ったのです。そうしたら結局そういうものが集まってしまって，かえって得をしたということになったわけです。

二流品，三流品とは限らず，日本にはいくつかの古い本の集積があります。例えば，京都大学の上野文庫，名古屋大学のホッブズ・コレクションなど。名古屋大学の場合は，その前に小川文庫というのがありますが，これはばらばらになってしまって文庫としてまとめられていません。小川文庫というのは，もう伝説化しているのですが，大倉財閥の幹部の小川さんという人から買ったのだそうです。ぼくが名古屋大学に来た時にはもうすでにありました。実は，ぼくは名古屋大学の図書館というのは全然だめだと思っていたので，名古屋大学に来ることについて迷っていたのですけれど，今から考えるとずいぶん贅沢な話ですが，この小川文庫を見てこれなら来てもいいと思いました。それから東大には先ほどのアダム・スミス文庫がありますが，図書館全体としては震災の打撃でだめなのです。もちろん全部だめになったわけではありませんが，震災の打撃から完全に回復していない。逆に各国からお見舞品が来ましたから，焼け太りというのもありまして，官庁出版物はずいぶんあります。それから一橋大学には第一次世界大戦後に起こった敗戦国ドイツ・オーストリアのインフレーションに便乗して買い込んだメンガー文庫というのがあります。これはたしかヴィーン大学の学生が反対デモをやったはずです。それにもかかわらず日本に持って来てしまったのですが，正規の購入ですから別に盗んできたわけではない。ですから日本軍が大陸でやったようなことはないのですが，時々そういう皮肉を聞かされます。例えば，昭和天皇がヨーロッパへ行った時に，ついでにメンガー文庫を持ってきて返したらどうだと言われたこともあります。まあこれは冗談ですが。

日本大学の経済学部にはアメックスのコレクションがあります。これはクレジット・カー

ドをやっているアメックスが，投資目的で買ったものを売り出したものです。だからずいぶん高いものにつきました。だいたい日本に入ってくる洋書の値段というのはべらぼうに高いのです。古本だと2倍ぐらいになるのではないでしょうか。それでこのコレクションは3億円以上で日本大学に入ったわけです。また，専修大学にはフランス革命関係のベルンシュタイン・コレクション，あるいは東京経済大学にはローダデールのコレクションが入っていて，みな億を超える洋書です。こんな調子で現在の日本の金余りが，ファン・ホッホの絵を買うばかりでなく，このような蔵書，個人蔵書やコレクションを買うようにも動いているのですが，全体としてはまだまだ十分とはいえません。それにもかかわらず，外国の研究者には，日本人が買いまくるから値段が上って困ると恨まれているのです。たしかフランクリン文庫が購入されたときだったかと思いますが，これならいけるというので，マジスというパリの古本屋が値段を全部2倍にしたという話さえあります。というようなことで，日本にも古本はかなり入っているのですが，それでもやはりヨーロッパのように一時間飛べば隣の国に着いてそこのものが読めるという状態ではありませんから，日本で研究するにはまだまだ足りないという気がしております。

あとでお話ししますように，現在のぼくはアダム・スミスの蔵書の所在を探すという名目でどこにでも行けることになっています。そういうことで，いろいろな所を歩いていると，また，いろいろなものにぶつかるものです。それが面白いのです。まえにも放浪しているうちにぶつかった例はありまして，今，名古屋大学の図書館にある『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の初版もそうです。これは今ぼくが手掛けているスミス蔵書目録の仕事のもう一つ前のものをやっていた時，エディンバラ大学の図書館で仕事をしていると，その道のむこうに小さな古本屋がありまして，それがどうしても気になってしょうがないので行ってみたのです。その親父が「ちょっといいものを見せてやるから倉庫まで来い」というのです。すると，たしか蝋燭をつけてはいっていった湿った倉庫の中に，あの『ブリタニカ』の初版があったのです。そして「これで，ちょっと儲けさせてもらいたい」というのです。いくらかと聞くと，当時のお金で1万いくらです。そのお金を持っていないわけではなかったのですが，それよりもエディンバラに長く滞在したいと思ったので，その当時の名古屋大学の図書館長に手紙を書いて買ってもらったわけです。その後まもなく日本大学にもう一つの版が入りまして，それが123万円だった。これは損をしたなあと思いました。その前の図書館長の松坂佐一さんに笑われました。「君，イギリスの初版，持っていれば上がるに決まっているだろう。そんなことする馬鹿あるか」って言われたのですが，すでに遅かった。国有財産ですから取り戻すわけにはいかない。というようなことがあったり，それからだんだんそうやっているうちに，易者が黙ってすわればピタリと当たるというのがありますが，古本屋に入って「あっ，ここにあるな」ってことが勘でわかるようになる。ある時アヴィニョンでうろうろしていたら古本屋があったのです。ここには何かありそうだと思ってはいり「社会科学はどこにある？」と聞くと，そこの親父が「お前の目の前だ」と言うので，目の前をひょっと見ると，そこに大東文化大学にいる小林昇さんに頼まれていたジェイムズ・ステュアート（Steuart，James Sir：1713－1780）のフランス訳がちゃんとあるわけです。

こういうふうにしていくつか集めているうちに，だんだん自分のものが積み重ねられて来て，その結果としてスコットランド啓蒙思想に関しては名古屋大学の『調査と資料』で，イングランドの啓蒙思想については名城大学に来てから，蔵書目録を出しました。これは研究者には配布しています。ぼくはこういう

資料は研究者の利用のために提供すべきもの，つまり公共的なものだと思っています。資料だけを抱え込んで他人に見せない人がありますが，これはどうしようもない。ただ，手軽に提出すると困ることもあります。例えば，借りたものを返さない人がいます。これは特に学生に多い。名古屋大学に長谷川正安という憲法学の大家がいました。相当な豪傑ですけれども，その豪傑を驚かした学生がいました。かれが一橋大学から貴重書を借りてきて，それを学生に貸したら，その学生はその晩おでん屋にその本を忘れてしまったのです。その本は結局返ってきたらしいのですが，さすがの長谷川君も一時は青くなっていました。このようにひじょうに危ないこともあるのですが，ぼくはなるべく研究者の社会ではそういう資料を自由に利用できるようにしたいと思うので，蔵書目録を公刊しています。

そういう古典は再生産できませんから，リプリント版を出すということになりますが，しかしリプリント版でも慈善事業ではないのですから，マーケット・リサーチをやり，需要が少ないとみたらやめてしまう。そういうことがありますからどうしてもオリジナルが必要なのですが，オリジナルは絶対に増えないわけです。紙の質によってはもう読めなくなることもあります。特に19世紀のパルプ製紙になると，余計にいけません。それ以前でも小さなパンフレットなどは悪い紙を使っていますからなくなりやすい。ではどうしたらいいかというと，これもある時スコットランドのエディンバラの古本屋で聞いた話ですが，その時ぼくはある本を探していまして「こういう本はないか？」と聞くと，「そんな本はマーケットに出て来ない。それを持っている蔵書家を見つけて，その人が死ぬのをお待ちになったらいいでしょう」というのです。どうも実際に古本屋はそういうふうにしているらしい。古本屋というのは，そういうのに目をつけて，つきあっていろんな便宜も図ってやるんですが，実はその人が死ぬのを待っている。まあ，待たれた方もうすうす気がつくだろうと思いますけれどね。ぼくはまだ，そういうことをされた覚えはありませんから，当分生きていると思います。もっとも「先生，あの本どうするんですか」と聞く古本屋も時々います。

それで，死にぎわですね。死にぎわが大変難しいのです。やはりアダム・スミスに関係があるのですが，ケインズの高弟にピエロ・スラッファ（Sraffa, Piero），イタリア人ですからズラッファというのが正しいのでしょうが，その人がケンブリジのトリニティ・カレジにいました。彼はファシズムに追われてイギリスに来てトリニティ・カレジにいたのですが1983年に亡くなりました。ぼくが前のスミス蔵書目録を作ったのは，実はこの人のアドヴァイスがきっかけだったのです。ぼくは最初簡単なスミスの蔵書目録を作り福島大学の『商学論集』に発表したのです。その抜刷がどういうわけかスラッファの目に止まったらしい。かれからその目録を『エコノミク・ジャーナル』に載せるように書き直さないかという手紙が来ました。それからだんだん広がって一冊の本になり，Cambridge University Press から出版されたわけです。それが20年前です。その過程でいろいろアドヴァイスしてくれたのがスラッファなのです。スラッファの部屋にはいると壁一面に古い本やパンフレットなどが並んでいる。その本の中に『国富論』の初版がありまして，それもただの初版ではないのです。スミスの蔵書票があり，スミスの自筆で直してある。その直しは大したことはないのですが，やはりスミス自身の蔵書であったということが重要なのです。その本がですね，ぼくが最終的に蔵書目録を作ることになってトリニティ・カレジへ手紙を出したら，ライブラリアンから「話は聞いたことがあるけれど自分は見たことがない。今もない。スラッファの蔵書は全部トリニティ・カレジに入ったけれども，その本は存在しない」と言ってきたのです。では，そ

の本は一体どうなったのだろうか，ということですが，ここに蔵書家スラッファの悲劇のようなものがあるわけです。

スラッファは自分の記憶力にひじょうに自信があったのです。ちょっとその前に，スラッファがこれだけの蔵書を作り上げた財政的基盤は何であったかということについて少し触れておきます。最近ブリティシュ・アカデミーのプロシーディングにカルドア（Kaldor, Nicholas：1908－1986）がスラッファの伝記を書いていまして，その中で実は日本の公債だったと言っています。戦争中に買ったのだそうです。スラッファは，日本が勝っても負けてもこれは必ず戻ってくるということで，それを買い占めて，それが儲けになり，本を買えたんだと言っています。だから日本も多少は貢献したんですね。それで，そういうふうにして集めたんですが，スラッファは記憶力に自信があっただけに，かえって記憶に頼ることになり，記憶が衰えた時には目茶苦茶になってしまうわけです。例えば，ぼくに会う約束をしていたのに忘れてしまうこともある。それで「何だ，おまえ今日来ていたのか」というようなことを言うわけです。それから，まあとにかくランチを食べに行こうと部屋を出る。しかし鍵がない。しょうがないのでそのまま開けていく。ところが食事を済ませて帰ってくると，今度は「鍵がないからはいれない」などと言い出す。こんなふうに最後はかなり悲惨でした。それをひやかして，スラッファは自分の記憶を信用してどこにも記録しないで金の延べ棒をスイス銀行に預けておいたのだけれど，彼の記憶が衰えたため忘れてしまって，もう永遠にあの金の延べ棒は出てこない，という噂がフランスでまことしやかに流れました。そんな話をストラスブール大学の教授から聞いたことがあります。そういう状態の時に，悪い奴が「スラッファさん，この本を貸して下さい」と言って持っていってしまう。それでわからなくなってしまう。そういうことが他の本について実際に起っている。ロンドンのバーナード・クォリッチというドイツ系の古本屋にプール・ウイルスンという重役がいますが，かれはスラッファがいたトリニティ・カレジの出身です。かれはスラッファの晩年に蔵書の整理を少しやっていたのですが，その時も自分がいることを知っていながら，スラッファは散歩から帰ってくると「あなたは誰だ？」と聞いたと言うのです。かれがスラッファの蔵書であることをしっている本を，この店に売りに来た若い奴がいる。そういうわけですから『国富論』の初版も盗まれたに違いないということです。ですからやはり記憶力がおかしくならないうちに本は売ってしまわないと損みたいです。それがスラッファが残した教訓です。　このほかにもまだいろいろなものにぶつかっているのですが，それらを一つ一つ話していても仕方がありませんので，そろそろスミスの蔵書の方に入ります。

2

スミスの蔵書が一体どんな意味を持つかということは，先ほども少し触れたのですが，スミスの思想形成に関わるのです。スミスは道徳哲学者であり，地位としては道徳哲学の教授だったわけです。そして『国富論』の著者という経済学者でもあった。それから著作をずっと見て行きますと文学論も書いているし天文学史も書いている。というような調子で，当時の学者はたいていそうなのですが，広い意味での社会科学者であり，どれが専門とは決められない。むしろそこにその当時の社会科学者の強みがある。今のように専門馬鹿ではないということです。ですからスミスの蔵書もずいぶん範囲が広いわけです，量的には，だいたい1,800点ぐらいです。１点が何巻もあるものがありますから，全体の冊数はだいたい3,000冊から5,000冊ぐらいだと思います。

スミスの蔵書は，スミスが自分の思想をどのように形成して行ったかということを調べ

るのに役に立つだけではなく，もうひとつ別の意味があります。ぼく自身はそちらの方がおもしろいと思っています。スミスの蔵書の中にはスミスの後の世代の本があります。おおくが寄贈書で，先輩アダム・スミスに後輩達が贈っているわけです。それによってスミスの思想がどういうふうに波及して行ったか，普及して行ったかということがわかって来る。これはまだきちんと確認されていないのです。そういう関係から手繰って行くことは，今のところ蔵書目録の方が忙しくて，まだ本格的にはとりかかっていません。

こうしてスミスが自分で集めたもの，あるいはもらったものが約1,800点ありますが，スミスは死んだ時にそれを甥の法律家デーヴィッド・ダグラス（Douglas, David : 1769－1819）に譲り渡しました。そしてダグラスも死んだ時にそれを２人の娘に分けた。２人の娘に分ける時が面白いのですが，機械的に冊数を同じにしたのです。ですから全集ものでも，例えばガッサンディ（Gassendi, Pierre : 1592－1655）の全集６巻のうち，１巻がこちら他の５巻が別の方にあるということがおこる。またルソー（Rousseau, Jean Jacques : 1712－1778）の『エミール』の３巻本も２冊と１冊に別々になっている。なぜそんなふうになったのかというと，イギリスでは形見分けの時にはそういうことはよくあるのだそうで，例えば，一対のカップとソーサーを分けてしまうようなことは当たり前のことらしい。ですから本の中身とは無関係に分けてしまったのです。こうしてダグラスの２人の娘の頃からスミスの蔵書の散逸が始まったのです。

その２人の娘というのは，カニンガム夫人とバナマン夫人といいます。バナマン家に残った蔵書は２回に分けて，とにかくエディンバラ大学の神学部に寄贈されました。なぜ神学部に寄贈されたかというと，夫のバナマンという人は牧師で，エディンバラ大学の神学部出身だったのだと思います。ですからその部分は完全にエディンバラ大学に残ったわけです。

しかし，問題はカニンガム家に残った蔵書の方です。カニンガム夫人の夫が死んだ時，1878年にエディンバラでその蔵書は売りに出されました。その競売目録があるといいのですが，これがいくら探しても見つからない。それからさらにその子で，ベルファスト大学の化学の教授だったらしいカニンガムが，ベルファスト大学にその蔵書を寄贈しました。しかし，どういうわけかその寄贈リストに載せられた本が全て寄贈されたわけではなく，自分の手許にいくつか残しておいたらしい。それがまた売りに出されたり，あるいは盗み出されたのかもしれませんが，とにかくそういうものがある。その後，その残りを1918年にロンドンの古本屋に売り，1920年にロンドンにいた新渡戸稲造がそれを買って当時東京帝国大学の法学部から独立した経済学部に，独立の記念として寄贈したのです。これが全部で150点あります。したがって現在エディンバラ大学にあるものとベルファスト大学と東京大学に残っているものが，スミスの蔵書の大部分です。あとはばらばらです。そのばらばらに散らばったものをいろんな人が買い集めています。一つはアメリカのハーヴァード大学のビジネス・スクールにあるクレス文庫に10冊ぐらいあります。アメリカではもうひとつジョンズ・ホプキンス大学にあります。イギリスではスミスの母校であるグラーズゴウ大学，そしてロンドン大学のゴールドスミス文庫の中に入っています。

こういうふうにばらばらになったものを，もう一度再構成するという仕事をジェイムズ・ボナー（Boner, James : 1852－1941）というグラーズゴウ大学のスミスの後輩に当たる人が，90歳近くになるまで続けたのです。かれの最初のスミス蔵書目録は1894年に出ましたが，その後も死ぬまで増補の仕事を続けていたようです。しかし残念ながらそのさいごの増補作業の原稿が見つからない。ボナーの蔵書そのものはグラーズゴウ大学に寄贈され

ているのですが，その中にかれが白紙をはさんで製本させた目録があるということです。

そのボナーの仕事が公刊されたかぎりで完全であれば問題はない。ボナーはかなり早くからその作業を始めていますから，スミスの蔵書が散逸しないうちにそれを見ることが出来たはずです。ところがかれの仕事はどうも当てにならない。当てにならないことを最初に教えてくれた人は，東大の学長にもなった大河内一男さんです。ぼくがブリティッシュ・カウンシルのスカラーでグラーズゴウにいた時，大河内さんが「ボナーはどうも間違っている」と言われた。それでよく見てみると確かに違っているのです。それからぼくは全部現物を点検しようと思い，この仕事を始めたのです。

作業を始めてみるとかなり大変なことがわかった。例えば，エディンバラ大学の神学部図書館に行って調査すると，スミスの蔵書は暖房のない寒い地下室の倉庫に置いてある。神学部の図書館ですからスミスの蔵書などそれほど大切にしていない。中には床積みにしてある本もあるぐらいで，その革表紙の本を学生が踏み台にしているということもありました。それほどひどい状態でした。そういう状態のものを調べるのですからかなり大変な作業でした。しかも僕は貧乏留学生でしたから余り長く滞在できず，仕事が粗雑になってしまった。そう後悔して現在その仕事をもう一度やり直しているのです。

それで，その時一応仕上げた結果が先ほど言いましたスラッファの目に止まったということになるのです。そして，その蔵書目録の序文にぼくは，「エディンバラ大学において，蔵書は最悪の状態にある」と書いた。そうしたらエディンバラ大学が憤然としまして，当時の神学部のライブラリアンはスラッファに手紙を出しまして「自分は水田の目録を必ずout of dateにしてみせる」と言ったのです。しかし，どうもそうはならなかったようです。それでエディンバラ大学が何をしたかというと，かれらもただ怒っただけではなく，スミスの蔵書をすべて神学部から中央図書館に引きあげて再整理をしたのです。ですからまあ，結局ぼくの言ったことはいいことだったと思っています。それで今またその蔵書を調べ直しているわけです。

ボナーの仕事については，グラーズゴウ大学のスコット（Scott, William Robert :1868－1940）という人もそれを補足しようとして作業をしていた。スコットはカニンガム家との接触もあったようですが，1940年に彼が死んでしまい，その後カニンガム家の行方もわからなくなってしまうのです。それでぼくはグラーズゴウにいる時に，カニンガムがどこへ行ったのか探しました。そうしたらバーミンガムの近くに1930年代の後半頃まで先生をしていたカニンガムという人がいたらしいことがわかった。それでバーミンガム大学の中世史の教授，ロドニー・ヒルトンに聞いてみました。中世史家ならどういうふうに調べるのかなと思ったら，彼は古い電話帳で調べてくれました。それでミス・カニンガムというのがわかり一つスミス蔵書を掘り出しました。しかし，それにもわからないことがあります。その蔵書というのは『国富論』のドイツ訳で，スミスの蔵書票がありながらその表紙はジョージ3世（George Ⅲ：1738－1820）の紋章なのです。ジョージ3世というのはドイツから来ていますから，英語はわからないのでドイツ訳で『国富論』を読んだのだと思います。ですからそのジョージ3世がその本を持っていてもおかしくはないのですが，どうしてそれにスミスの蔵書票があるのかわからない。関係者が誰も生きていないのでもうわかりません。

ぼくがそういうことをしているということを聞いて，いろいろ紹介してくれる人があった。ある日グラーズゴウの町外れに住んでいたリヴィングストンという商人の家を訪ねると，父親が古本屋から買ったといってスミスの蔵書票のある本を6冊以上も見せてくれた。

それを当時グラーズゴウ大学の教授だったマクフィーに話したら「なんだ，リヴィングストンならおれのクラスメイトだ」ということで，結局それはまたグラーズゴウ大学にはいった。こんなふうに犬も歩けば棒に当たるみたいにいろいろありました。

ところで，さきほどお話した新渡戸稲造が買って東大の経済学部に寄贈したスミスの蔵書にはもうひとつ特徴があります。何かというとスミス自身が作らせた蔵書目録があるのです。1781年といいますからスミスが死ぬ9年前のものです。実は，これが次の問題なのですが，そのまえに東大のスミス蔵書の歴史をお話ししておくと，まずはいったのは関東大震災の少し前です。ですからその震災に遭います。震災で図書館も燃えてしまったのですが，いつも教授たちからスミス蔵書というのは大事なものだと聞かされていた当時の小使いさんが，とにかく全部運び出して無事だったわけです。その次は第二次世界大戦です。この時もやはり大変だというので最後に甲府に疎開させた途端，甲府が爆撃されたという情報がはいり，大河内さんの言葉ですと「皆青くなった」そうですが，この時も一応無事に帰ってきた。

さて，ボナーはこのスミスの蔵書目録，スミス自身の蔵書目録を使っているのですが，どうも十分に使い切っていない。それでこれをもう一度点検することが，スミスの蔵書の全貌を知るのに役に立つのではないかと思いその作業を始めたのです。この蔵書目録は東大の矢内原忠雄さんの編集で1951年に出版された。しかしこれは手書きであったため，かなり読み間違い，誤読がある。しかももっと困ることは，もともと自分用の目録ですからショート・タイトルで書かれている。したがってそのショート・タイトルからもとの本を探すのはかなり大変なのです。ただ幸いなことにショート・タイトルの省略の仕方がわりに正確であること，また巻数も正確なため，復元が全く不可能ではない。ショート・タイトルが正確であるということは，実は当たり前のことではありません。19世紀のかなりあとまでカタロギングというのは，その本があることがわかればいいという調子で，かなりでたらめでした。例えばグラーズゴウ大学が1793年に出した蔵書目録や19世紀の半ばにエディンバラ大学が出した3冊本の目録などを見ると，省略の仕方がいい加減なためぎりぎりのところがわからないのです。その省略の仕方がいい加減であるとか，目録の作り方がいい加減であるという点では，National Union Catalog（NUC）でも100%は信用できない。これもスミスの蔵書を探していた時にあったケースですが，ローレンス・スターン（Sterne, Laurence：1713－1768）の小説“The sermons of Mr. Yorick”の第3版をNUCで探すと，いくつかの図書館が所蔵していることになっている。その内のひとつのロサンジェルス郊外のハンティントンに行くと，そこにはその版はないと言うのです。つまりNUCが間違っていたのです。どうしてこういうことが起こるかというと，議会図書館ではいろいろな図書館から集めた目録カードを重ねて同じ版のカードをまとめるのですが，その時にミスがおこるのです。ですからNUCはそこまでの正確さはない。それからはNUCを疑ってかかるということにしました。NUCについてもう少し言うと，フランス語のアクセントなどは勝手に飛ばしていますから目茶苦茶です。もともと英語にとってはどうでもいいということで無視しているのです。もう少し面白いのは，イギリスでは“Church”とか“King”あるいは“Parliament”などはみな大文字にしているのに，NUCを始め米国の大学図書館ではみな小文字にしてしまっている。これは面白いので今度の目録では全て小文字にしようと思っています。

このようにショート・タイトルがぴったりあうもの，それから巻数があうものを探して，スミスが作らせた手書きの目録を元に戻すと

いう仕事をやっているうちに，1776年のアメリカのコングレスのプロシーディングにぶつかった。これはNUCでタイトルを探しても出ていないので，どうしたらいいか。そこでちょっと思いついたのがイェール大学のスターリング・ライブラリーです。それでイェール大学に行き「コングレスのプロシーディングが見たい」というと，そこのレファレンス・ライブラリアンが「何のコングレスですか」という。アメリカ人なら1776年のコングレスはすぐわかるはずなのですが，そういうことを言うので「フランクリンがいた」というと，赤い顔をして「フランクリン・コレクションがありますから，どうぞおいで下さい」といったのです。そして，そのプロシーディングを出してもらうと，アダム・スミスの蔵書票が付いている。こういう調子で一つ見つけ出した。

また松戸にある日大の歯学部の病院にスミスの蔵書票のある本があります。これは性病に関する本で，歯学部と性病がどういう関係にあるのかよくわかりませんが，ひょっとすると何だか知らないで買ったのかもしれません。同じようなことはトロント大学でもあった。トロント大学には3冊の本が揃ったものがあるとそこのライブラリアンから聞いたと，ボナー自身が書いているのです。それでぼくはトロント大学に行ってみた。ところが実際に行ってみるとそこにはなかった。そこのライブラリアンが気の毒がって，メトロポリタン・ライブラリーという公共図書館へ行ってみたら，というのでその図書館までいってみると，その3冊がありましたが蔵書票がない。3冊とも素人製本なので，これはもともと一緒になっていたものをばらしてしまい，別々に素人製本したのではないか，そしてその時蔵書票がなくなったのではないか，という想定ができる。この想定については，ハーヴァード大学のクレス文庫にいたカーペンターというライブラリアンが「蔵書票を重視するのは最近のことであるから，君の想定は正しいかもしれない」といってくれました。

トロント大学の図書館では驚いたことがあります。まず第一は，スペイン革命のコレクションが数百冊あるのです。何でスペイン革命のコレクションがトロント大学にあるのかよくわかりません。スペイン革命というのは1936年から39年にかけてスペインに人民戦線ができ，それに対してフランコ（Franco, Francisco：1892－1975）が反乱をおこした。そしてイタリアとドイツがフランコ側を応援し，いろいろな国から人民戦線側への応援があって内乱が続いたのです。その時，外国人の国際旅団というのができ，その指揮にあたったのがカリフォルニア大学の助手をしていた農業研究者でした。日本からはジャック・白井という人の参加が有名です。そういうスペイン革命あるいはスペイン内乱については，日本では多少の研究者はいますが，それに関するコレクションというのはおそらくない。名古屋大学の図書館に少しあるぐらいです。トロント大学にはそんなコレクションもあった。もうひとつ驚いたのは，MITの教授をしていたポーランド生まれのブロノフスキー（Bronowski, Jacob：1908－1974）の手稿が全部集めてあるのです。日本の図書館では学者が死んだ時に，その手稿類を全部引き取るようなことは余りやっていないようです。また引き取るだけの学者もいないようです。これはどちらが悪いのか知りませんが，トロント大学のそういう図書館の機能には感心しました。

そして，そういう図書館は一体どのくらいの人が使っているのかということを考えると，社会科学の古典をあつめたクレス文庫には，いつ行っても誰もいない。古典というのはそんなものかとも思います。しかし，同じようなロンドン大学のゴールドスミス文庫に行くといつも数人います。これはアメリカとイギリスの関心の違いなのかもしれません。貴重書の利用についてもう少し言うと，フランスのビブリオテーク・ナシオナールでは貴重書

の利用がひじょうに困難で，座席が10ぐらいしかないため夏など行列が出来ます。ブリティシュ・ライブラリーでもやはり夏はいっぱいになります。そういうふうに簡単に行けて，卒論の準備がそのくらいで出来るようになるといいのですが，日本ではまだまだそうはならないでしょう。

3

スミス自身が作った蔵書目録を一つ一つ確かめて歩き，全体で約1,800のうち1,500ぐらいを調べたのですが，これまで述べた以外にもスミスの蔵書はちらばっています。例えばスコットランドではエディンバラの真北にあるスミスの故郷カコーディにいくつか，そしてレディング大学に2冊という具合です。日本では，東大は別として，日大法学部に2点，同志社大学，京大にひとつずつあります。また，福山大学の経済学部にはおもしろいことにボッカチオ（Boccaccio：1313－1375）の『デカメロン』があります。

さて，スミスはこういう蔵書をどのように作り上げていったのかということが，もうひとつの問題なのですが，スミスの経歴と今までわかっている蔵書を比較してみると，ところどころおかしいなと思うところがある。まず第一は，スミスは学生時代にグラーズゴウ大学を卒業してオックスフォード大学に留学するのですが，その当時スミスは将来親友になるデーヴィッド・ヒューム（Hume, David：1711－1776）の本を読んでいて，それは危険思想の本だということで処罰されたことがあるのです。しかし，その本は没収されたのではないらしく，蔵書のなかにあります。

それからもうひとつ。スミスは，グラーズゴウ大学に就職する前なのですが，オックスフォードでそういうことがあったため嫌になりスコットランドに帰ってしまうのです。国に帰って最初にスミスが書いたのは，1756年に発行された同人雑誌『エディンバラ評論』第2号に掲載された学界展望です。『エディンバラ評論』というのはスコットランドの文化を興すために作られたのですが，スミスはその学界展望で，スコットランドだけを気にしていたらだめだ，ヨーロッパ全体を見ろ，と忠告しています。当時ルソーに注目していたスミスは，その中で特に『人間不平等起源論』から長い引用をしているのですが，スミスの蔵書の中にはその本がないのです。さらにスミスはその中で当時フランスで出始めていた『百科全書』を大変ほめているのですが，その本も自分では持っていない。『百科全書』の方はグラーズゴウ大学でその当時買っていたので，あるいはそれを利用したのかもしれない。意地の悪い見方をすれば，スミスは本を読まないで書評を書いたのではないかと疑うこともできる。ただスミスは29才の時，すなわち1752年にグラースゴウ大学の教授として着任したのですが，当時ファウルズ書店というのがグラースゴウ大学の出版部をやっており，同時に古本屋もやって大陸から本を仕入れて売っていた。ですからスミスはそこから本を買ったということも考えられます。しかし，やはりよくわからない。

その後まもなくフランスとの間に七年戦争（1756－63）が起り，ヨーロッパ大陸全体が戦争に巻き込まれて行く。そして，その七年戦争の間は大陸から本が入って来なかった，と主張したのが先ほどのスコット教授です。スコット教授がなぜそういうことを強調したのかというと，かれは，スミスの経済学の形成過程は大陸からの影響ではなく独自のものだということを主張したいのです。この考え方をスミスの蔵書にあてはめれば、七年戦争の間スミスは蔵書を構成して行かなかったということになります。しかし，こういう希望的観測がはいると事実が歪んでしまう。スコット教授の主張は間違いです。というのは，その頃ロンドンにいたスミスの親友ヒュームは，当時出版されたエルヴェシウスの本を手に入れているのです。そしてスミスにこの本を読

むように，と手紙を書いていますから，七年戦争で本の輸入が途絶えたというのは間違いです。どういう方法で入手したのかはわかりません。ただ密輸業者というのはいつもいるのですから，そう驚くことでもありません。

その後スミスは，最初に出版した『道徳感情論』が非常に評判がよかったため，バックルー公爵の家庭教師として大陸に渡る契約をしていた。大学教授よりもその方が良かったようです。スミス自身が『国富論』の中で書いているのですが，当時のグラースゴウ大学の教授の給料は一部分が固定給であとは授業料なのです。またスミスは，オックスフォード大学の教授は講義の真似事さえすることをやめてしまっている，と非難しています。というのは，オクスブリジの教授は固定給によって収入は安定しているし，地位も国王の任命ですから安定しているため，まともに教授しないのです。スミス自身も，オクスフォードの学生としては一週間に2回しか講義を聞かないでいいというのですから，教授の怠慢ぶりはわかります。そしてスミスは，大学にも自由競争の原理を導入し，教授は授業料で生活するようにしろ，と主張しているのです。スミスの講義の仕方というのはとてもすごくて，例えば午前中に講義をして午後にはその講義の試験をするというものでした。ですから，スミスも大変でしたが試験を受ける方も大変だったと思います。そして，スミスの講義は非常に評判が良かったので，グラースゴウの商人の息子たちが別に資格を取る必要はないにもかかわらずモグリで聴講したそうです。

さて，スミスはその後バックルー公爵とフランスに行き，フランスのいろいろな資料をかなり集めたようです。特にフランスの高等法院，すなわち高等裁判所の記録を集めました。フランスの高等裁判所というのは，国王の命令を受け，それを法律にするという機能を持っていました。逆に言うと，国王との間に常に争いがあったわけです。スミスはそういう記録をかなり集めて来たのです。

このフランス旅行では他にも重要なことがあります。スミスは1年ほど南フランスのトゥルーズに滞在していましたが，その時に冤罪事件が起るのです。というのは，ある日トゥルーズのジャン・カラスという商人の息子が死体となって発見されたのです。トゥルーズではだいたいカソリックが強かったのですが，そのカラス家はプロテスタントであった。ところが弁護士として身を立てるため，その息子は転向したのです。それで，犯人は息子の転向を憎んだ父親だということになった。カソリック教会の牧師はそれを立証するため，教会に集まってきた会衆に向かい「あなたがたはジャン・カラスが息子を殺したという噂を聞いたか。噂でもいいからこれを全部申し立てて下さい。申し立てないと地獄に落ちますよ」と呼び掛けたのです。大衆はやはり地獄に落ちるのが嫌だから皆「聞いた，聞いた」というわけです。これを証拠としてジャン・カラスを車裂き・火あぶりの刑で殺してしまったのです。この話を聞いたのが啓蒙思想の大立者であるヴォルテール（Voltaire：1694－1778）です。ジュネーヴにいたヴォルテールはフランスの友人に，この裁判はおかしいという手紙を出して再審請求運動をはじめた。それで国王の命令で再審委員会ができ，ちょうどスミスが行った時に，死んでからですがともあれカラスは名誉回復された。その問題が後になってスミスの『道徳感情論』の第6版の増補部分にはいって来ている。この問題については話がややこしくなるのでこれ以上深くは言及しませんが，とにかくカラス裁判についてのパンフレットが9点スミスの蔵書の中にはいっている。この資料もその時に集めたに違いありません。

もうひとつあります。イギリスでステュアート王朝復興の運動をしたジャコバイトの反乱というのが1745年にありますが，その反乱に参加したマンチェスター出身のジョン・ホルカー（1719－1786）という人がいます。この

男は死刑にされる直前に脱走してフランスに渡ります。そしてフランスのマニュファクチャー，すなわち製造業の総監督になる。そのホルカーの記録や本がスミスの蔵書の中にある。ホルカーという人はルーアンに工場を持っていたので，スミスはそこでかれに会ったのではないかと思われます。しかし，これは何の証拠もありません。

以上のように辿って行くと，スミスがかなりの本をフランスから持ち帰ったということがわかります。それは，スミスがロンドンで，本を詰めた四つの箱をエディンバラに送ってくれと頼んだことからもわかります。ただしその内容はわかりません。さらにスミスはその本を故郷のカコーディに持ち帰り，そこで『国富論』を書き始めるのです。そして『国富論』をほとんど書き上げ，再びロンドンに出る。しかしロンドンに出てきた時には，もう骨と皮だったのでしょう。スミスはもう死ぬかと思い，親友のヒュームに死んだら自分の遺稿を全部処理してくれと頼んで出掛けていったのです。

ところで，スミスは何故それほどやせ衰えて死ぬと思ったのでしょうか。『貧乏物語』の河上肇の説はこうです。スミスはもともと道徳哲学者であり，その道徳哲学の中心問題は「同感」，すなわち sympathy であった。その道徳哲学者が『国富論』を書いて経済学者に変った。スミスの経済学の中心は「利己心」である。だからスミスは全く反対のものに変った。それほど苦労したのだから，スミスは死ぬかと思った。これがいかにも河上肇らしい説なのですが，実は全く間違っています。というのは，河上肇は道徳と利己心というのは対立すると考えているのですが，スミスの場合はそうではなく，個人がそれぞれ平等の立場で自分の利益を追求したら社会はどうなるか，というのが問題なのです。すなわち，スミスの自由主義，あるいは利己心の経済学の中には，必ず平等という条件がはめこまれているのです。河上肇はそれに気が付かなかったようです。そういう意味でスミスをもう一度読み直すことを，皆さんにもお勧めしたいのです。

さて，スミスの蔵書目録を作っていて，できるだけ忠実にタイトルを写していくといろんな問題にぶつかります。例えばギリシャ文字の問題です。ギリシャ文字というのはもともと大文字しかなかった。そして中世の終わり頃に小文字が発明された。ですから，その頃の小文字というのは，いまでは読めないのです。だんだん変化していきますから。しかもタイトルを忠実に写していくと，大文字の途中で全く恣意的に小文字になっていることがあります。それをそのまま写すと格好が悪く汚いので困ってしまいます。もうひとつは，ギリシャ語の小文字にはアクセントが必要なことです。大文字には全く付いていないのですが，小文字にするとアクセントを付けなくてはならない。これはフランス語と同じです。フランス語の場合は，今のアクセントと違い逆になっているものがかなりあります。ですから「原文通り」と断わって引用するケースもあります。しかもそのアクセントが歴史的にかわっているだけではなく個人差がある。

それから，今となって失敗したと思っていることがあります。というのは，非常に長いタイトル，例えば1ページ全部タイトルというようなものもあり，それを全て写すのは大変ですから途中で省略することにしたのです。それで省略するものを決めました。まず，モットーを省略しました。それから出版者の住所。著者名はそれぞれの記入の最初に出てくるので省略しました。それから著者のタイトル，すなわち身分や職業などを省略しました。このタイトルを省略してしまったと思っているのです。しかし今さら元へ戻ることはできませんのでこのままで行こうと思っているのですが，タイトルを省略したために著者が何者かわからないものがでてきた。スミスのように有名人はいいのですが，例えばどこかのジェジュイットの坊さんが書いた本などは，ジェ

ジュイットと入れておかないとよくわからないのです。残念ながらそれも省略してしまいました。

こういうような悩みを抱えながらスミスの蔵書目録の作成作業を続けています。だいたい一日20行ぐらいできればいい方です。なぜそんなに時間がかかるかといいますと，実はもうひとつ仕事があるためなのです。蔵書目録の中には，それぞれの本をアダム・スミスがどのように使ったかという，すなわちスミスの著作へのレファレンスを付けているのです。これは，スミスの著作の当該部分を引用して注にしています。さらにもうひとつはスミスの後輩達がスミスの本をどのように使ったかという問題です。これについては，スミスが持っている後輩達の本の中にスミスがどのように引用されているか，ということを引用しておけばいいのです。この作業は探すのに非常に時間がかかるのですがとてもおもしろい。なかにはスミスの批判者として知られている人が，著作の中ではスミスをひじょうにほめていたりします。そういうのはひじょうにおもしろいのですが，おもしろければおもしろいほど時間がかかるということになります。

最後にスミスの蔵書票について少し述べておきます。最近ライリー・スミスというイギリスの古本屋からスミスの蔵書票が付いた『国富論』の初版本があったという連絡がありました。しかしスミスの蔵書票はひじょうに簡単です。ですから，これは偽造できると思います。偽造してどこかの本に貼っておいたらきっとひじょうに高く売れます。もうひとつ心配しているのは，スミスの蔵書の中に蔵書票がない本が時々あるのです。例えば10冊の全集があるとすると，もともとその全集には全て蔵書票が貼ってあったはずなのですが，そのうち1冊蔵書票が剥げ落ちているものがある。その蔵書票を別の本に貼れば，もとの10冊の全集は9冊に蔵書票が貼ってあるのだからスミスの蔵書ということで通用するし，別な本も蔵書票が貼ってあるのだからスミスの蔵書ということになり，これもまたひじょうに高く売れる。そういうことがないとは限りません。ですから，皆さんが図書館でもしそういうものを売りつけられるようでしたら，一応警戒した方がいいということになるわけです。